

教室だより

〒952-1209 佐渡市千種丙 178 番地 1

TEL : 0259 (63) 4156 (直) 4115 (代) FAX : 4117

http://kanai-es.sado.ed.jp E-mail : skotoba@sado.ed.jp

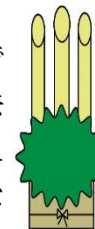
佐渡市立金井小学校
佐渡ことば・こころの教室

令和2年1月8日

第 863 号



明けましておめでとうございます。
昔の日本では年が明けるとみんなで
一つ年を取ると考えたそうです。過去
を一新し、新たな気持ちで新年を迎え
る。日本のよいところの一つ。新たな
年をどう過ごすかは自分次第ですね。



「教室の役割」

佐渡市教育委員会
教育長 渡邊尚人

佐渡ことばの教室が設立から 50 年を迎え、佐渡市の教育を担う一つの機関として、これまで多大な成果を上げてきました。

先日、令和元年の流行語大賞が発表されました。選ばれたのは「ワンチーム」です。ラグビー日本代表の活躍により、その結束を示す言葉となりました。翌日の新潟日報に本県出身の稲垣啓太選手が語っていた記事が載っていましたので紹介します。「スクラムを組む選手には一人一人異なる役割がある。同じ方向に向かおうとしても、それぞれの役割を果たせなければ機能しない。」

ワンチームを上から一方的に押しつけるのではなく、多様な価値観を尊重しながらチームをまとめ上げていくことが何より大切だと感じました。教室も 50 年を節目に、これまでを真摯に振り返り、今以上に障がいを持つ子供たちの自立支援という役割を果たし、佐渡市の教育全体の充実に努力してください。



(こころ→からだ) ⇔ことば

二人目の子どもを産んだ後涙が止まらない。これが世に言う「産後うつ」か、私にも来るのか。／主人の手術。当の本人より不安定に。じっとしてられない。眠れない。血圧が高い気がする。私は大丈夫か。／更年期？喉のつかえはストレスか。動悸はいつ止むのか。内科と婦人科と耳鼻咽喉科を渡り歩く。／今まで、体→心はよくあったが、心→体を実感した。

朝になるとお腹が痛くなって学校を休んでた子。決まって給食前に不調になってた子。夜になると悪い事ばかり考えると云ってた子。こんなに、しんどかったんだね。「楽しいこと考えて、切り替えてこう。」ってアドバイスをしていたけれど、自分一人ではどうにもできないことって、あった。

薬も出してもらった。でも一番の薬は、お医者さんも含むみんなに聞いてもらったことだった。言葉の力って凄い。話した分だけ軽くなった。

私によければ、今度また話してくれることを待っています。

「楽しいこと一緒に考えよう。」

(坂井)



親の会コーナー



会員の声 No. 74

I・M (金井地区)

こだわりがとても強い娘。それは日常生活至る所に表れ、短気な私としょっちゅうぶつかっていました。「私だって頑張っているのに!!」といつも言う娘に、私はその頑張りの成果しか見ていませんでした。

このままでは優しい娘の心を壊してしまうと危機を感じ、担任の先生と相談して通級指導教室に入れていただきました。それから少しずつ親子共落ちついて過ごせるようになり、娘が頑張っているのは、一生懸命生きていることなんだと気付くことができました。

先生方をはじめ私ども親子に携わっていただいているすべての方に感謝しております。今でも、そしてこれからも。

終了式・懇話会に参加しませんか

佐渡ことば・こころの教室では、毎年「終了者懇話会」を開催しています。今年度終了となった子どもとその保護者の方を対象に、これまでの頑張りを称え、教室に関係するみんなで終了を祝うための会です。昨年度は子ども12名が参加しました。

終了式では、「終了証書」授与が一人一人に行われます。懇話会は、同じように終了する仲間と語り合う場になります。終了される皆様、ぜひご出席をお願いいたします。

○日時 3月18日(水) 15:30~16:30

○場所 金井小学校



ことば・こころメモリアル(ここメモ)

金井小「ことば・きこえの教室」に博報賞

この見出しは、1994年(平成6年)11月26日(土)付けの新潟日報の見出しです。当時、新潟日報だけでなく、毎日新聞や産経新聞、朝日新聞などいくつもの新聞に取り上げられたことから、大きなニュースだったことが伺えます。



財団教育事業局長
荻原さん

児玉勝巳先生

博報賞は、博報財団のホームページによると、「『ことばの力を育むことで、子ども達の成長に寄与したい』という願いから」創設されました。当時の新潟日報によると、「次代を担う子供たちに優れた教育をしている団体、個人に贈られる」賞です。

昭和45年、金井小学校に「ことばの教室」が開設され、さらに昭和48年には「難聴教室」(きこえの教室)が開設されました。当時は、「教室だより」だけでなく、「親の会だより」も発行されていました。島外からの講師を招いての講演会や、親子キャンプなどの宿泊体験など、親子で一緒に学ぶ活動がありました。献身的に佐渡の子どもや保護者と向き合ってきたことが、この賞につながったのです。

当時の新潟日報には、担当者である児玉勝巳先生が指導について、「子供の視点に下りて心を開いてもらい、自らも学ぶという姿勢がなければ」と語られています。

受賞当時から25年経った今も、この姿勢は引き継がれています。